

実 践 構 想

「院 生（修 士 １ 年）の 研 究 テー マ」

「総合的な探究の時間」の持続的な活動改善が可能となる組織運営に関する研究 教職実践研究科 浅本 拓哉 指導教員 鈴木 瞬・小浦 寛

問題の所在

- 進路多様校において取り組みの困難（中井2022）
- 「指導内容の差」 ○「指導の仕方の難しさ」

- 一部の教員のみが探究活動に関わる運営体制
- 業務の偏り ○捉え方・意識の差（松尾2024）

※進学校・・・卒業生の50%以上が4年制大学に進学する高等学校
進路多様校・・・進学校以外の高等学校



現状

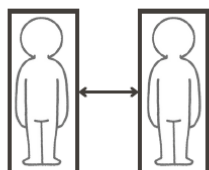
- 教員と生徒の負担感増加
- 授業時間数の不足
- 単位数増案に伴う教員間の意見対立
- 今後の探究の在り方についての議論



原因



「個業性の組織」佐古（2011）



ナラティブの違い



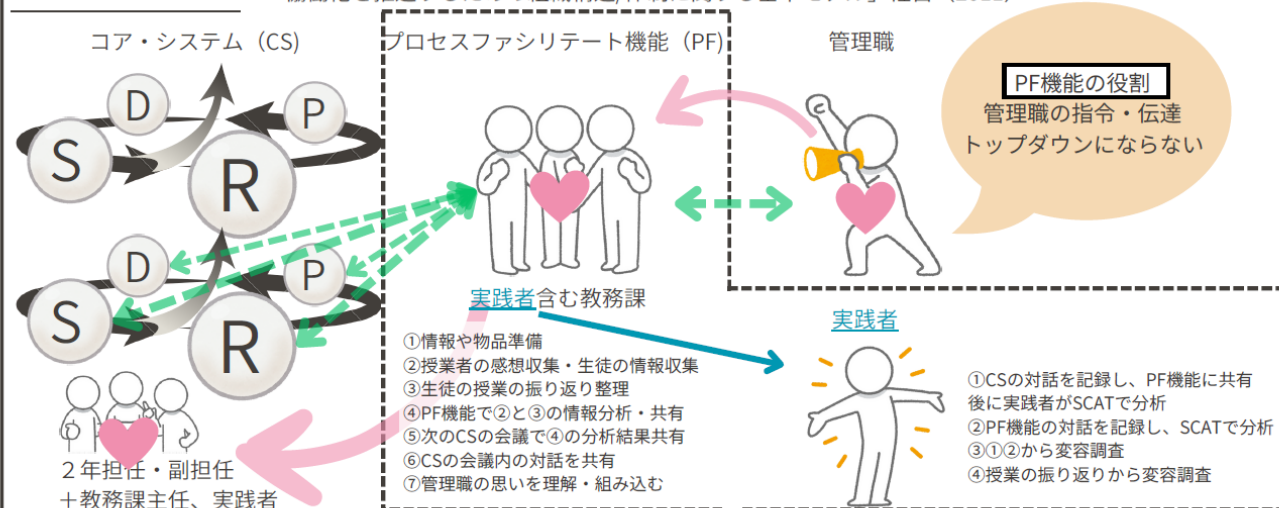
「適応課題」宇田川（2020）

研究目的

教務課のファシリテート機能を高める組織改善を行い、総合的な探究の時間の授業運営サポートを行う。また、そこで得られた実践の成果と課題を学校経営（学校教育目標の構築）につなげ、学校の魅力としての地域との連携の在り方を再考する。そのような活動の中で教員、生徒がどのように変容するかを調査し、明らかにすることを目的とする。

研究計画

「協働化を推進するための組織構造/体制に関する基本モデル」佐古（2011）



事前調査

対象：所属校の教員（非常勤は除く）28名を対象
方法：googleフォームによるアンケート調査（24件：回収率86%）
内容：教員の属性、探究活動の良さと改善点を自由記述で回答
分析：教員の属性を以下の3つのグループ（G）に分けて分析
第1G「今年度関わった教員」
第2G「今年度一時的に関わった、前に関わった教員」
第3G「今まで関わってこなかった教員」としてKJ法を利用
結果：第1Gと第2Gの間で探究活動に対する捉え方に顕著な差
→第3Gを除き再度分析
分析結果は右の通り

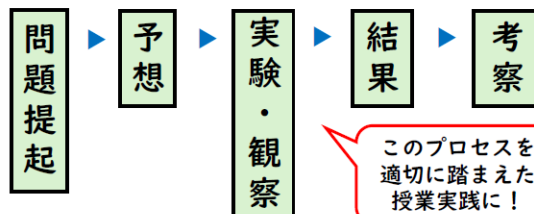
- ・第1Gは教員の「増員」必要性、第2Gは教員の「負担」の増大
- ・第1Gには「仮説実現可能性の高さ故、生徒の活動に無理が利く」、第2Gでは「教員の圧で探究させることへの疑問」
→生徒の自主的な活動を支援する、CSの暴走を止めるような部署の必要性
- ・「学校全体を巻き込んだ取り組み」「取り組み内容の見直し」「内容や進捗を再検討する場面」の必要性
→俯瞰した視点をもつ機関の必要性

学習に困難を抱える児童を支援し、授業理解を高める取り組みの提案 —小学校理科において—

教職実践研究科1年 有馬大 指導教員 武居渡 新村裕二

【研究テーマの背景】
通常学級では、授業についていけない児童が少なくない
↓
そういう児童には従来の教え方にプラスして支援が必要
※学習指導要領にも、通常学級内で特別支援教育の意義や目的の理解が必要と記載あり
↓
学習に困難を抱える児童を支援し、授業理解を高める
取り組みを探究し提案する

〈理科を選んだ理由〉
実験や観察といった予想を立てて学習に取り組む学びの過程が複雑で、困難を感じる児童が特に多いように感じる。



【研究目的】
小学校理科の授業において、学習に困難を抱える児童の教育的ニーズに応じたきめ細かな指導や支援の在り方を探究し提案する。

【研究対象】
対象学校：金沢市内の公立小学校
対象児童：小学校中学年
単元：小学校中学年の理科で、実験・観察を含む各1単元



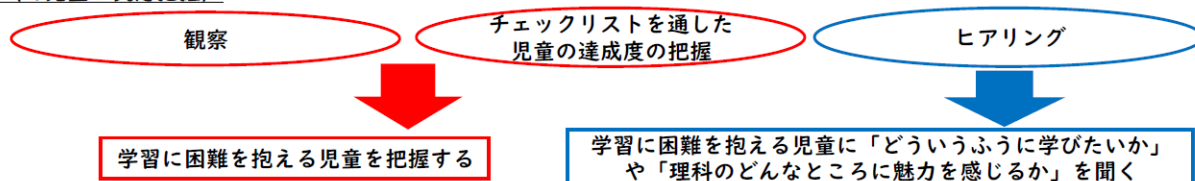
【予備調査】
「現職の先生方に聞いた授業実践のポイント3選」
自分はストレートマスターであり、効果のある授業実践の具体的なイメージが正直あまりつかめていない…
→予備調査として現職の先生方に、授業実践についてのアンケート調査を実施。特に以下の3つのポイントが挙げられた

「特別な支援が必要な児童には、どのような子がいたか」
「効果的な支援・あまり効果が見られなかった支援はそれぞれどのようなものだったか」

- POINT 01 授業に緩急や変化をつける
- POINT 02 環境や役割の調整を工夫する
- POINT 03 クラスを意識した工夫をする

◆実践していきたい取り組み
ICT活用、クイズ、ゲーム、座席配置や役割分担の工夫、少人数から徐々に人数を増やす活動形態
(個人→ペア→グループ)

【研究方法】
〈1. 児童の実態把握〉

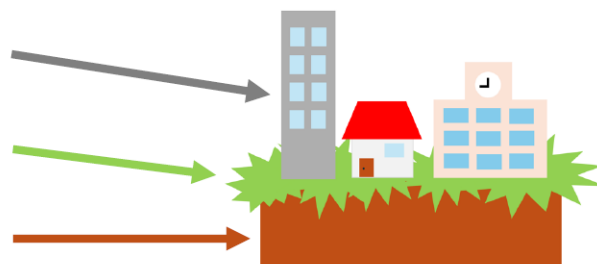


〈2. 授業実践〉

「授業づくりの3ステップ」
STEP3. 個別支援・合理的配慮
→支援が必要な児童に対して、それぞれの教育的ニーズに合わせた配慮を行う！

STEP2. ユニバーサルデザイン
→予備調査のポイントを踏まえた授業づくり！

STEP1. 教材研究
→謎解き型の学習スタイルで、問題提起、予想、実験・観察、結果、考察の学習過程の意識をUP！



教師の協調学習を支える業務ポータルサイトの開発

教職実践研究科1年 岩原拓真 指導教員 加藤隆弘 川谷内哲二

ICTでゆるやかにつながる 相互支援・問題解決の場作り

アフォーダンスを考慮した
使いたくなるデザイン



目指す姿（水車小屋が生み出すもの）

- ・ 時間・空間を超えた、教師のための相互支援ローカルネットワーク
- ・ 対話（否定しない・答えを出さない）の蓄積による、教師の主体化
- ・ 新しい価値を創造する持続可能なサイクル

（児童向けの校内ポータルも同時に制作）

総合的な学習の時間における ※ 適応的援助要請を促す教師の介入要件

教職実践研究科 北間小百合 指導教員 加藤隆弘・小浦寛

1. 問題と目的

(1) 問題

今、求められる資質・能力

「答えのない課題に対して、多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見いだしたりすることができる」(H28 中教審答申)

総合的な学習の時間において
グループ学習の指導・支援が**教師主体**
(計画、ふりかえり)

- ・教師の視点からグループ学習をモニタリングする知見の蓄積が必要 (児玉, 2018)
- ・協働学習における教師のあり方や専門性についての検討は不十分 (秋田他, 2016)



子どもたちから信頼され、意欲的な
追究を生み出す教師は、
活動の中でも、活動の後で
も、**子ども達に自由に感情を
言わせている。**

(せいかつか&そうごう第28号 p. 1
2021日本生活科・総合的学習教育学会)

教師が見ていることは何か？
学習進度の差？
表出する児童間関係の問題？
教師の思い



児童が感じていることは何か？
学習進度の遅れ？
児童間関係の葛藤？
児童の感情・考え

(2) 研究目的

総合的な学習の時間のグループ学習中の適応的援助要請を促す教師の介入要件を明らかにする

- 検討課題1 学習課題遂行場面での児童間の適応的援助要請—援助の様態を明らかにする
検討課題2 グループリフレクションにおいて児童間のやり取りから適応的援助要請—援助の様態を明らかにする

2. 研究方法

(1) 研究対象

金沢市立小学校 4, 5 年生 総合的な学習の時間

(2) 研究方法

- ①「課題遂行場面」に関わる支援…「グループリフレクション」を取り入れた授業
- ②援助要請の自己評価に関わる支援…OPPシートの手法を取り入れた活動

(3) 検証方法

抽出グループの児童の対教師・対児童への課題遂行場面等での変化の有無（表情、発話内容、行動等）を
参与観察を基にしたエスノグラフィーを用いて行う。

(4) 研究計画

0～Ⅰ期（2025年2月～4月）

- ・総合的な学習の時間、他教科のグループ学習場面の参与観察
- ・総合的な学習の時間の学習環境検討（材、学習課題、指導計画等）



Ⅱ期（2025年6月～10月）

- ・総合的な学習の時間の授業実践及び授業改善の検討・実施
- ・児童の学習場面の変容を授業の参与観察（ビデオ録画、OPPシート等含む）をもとに考察する

※適応的援助要請
(Newman2006)

「援助要請が必要な場面で
実際に援助を求める行動」

生徒が英語科での学習を自分事として捉えるようになる授業実践

～英語の歌詞について生徒が自らの問いを生み出す学習デザイン～

氏名：佐野 一馬 指導教員：滝沢 雄一・端崎 圭一



1 研究の目的

生徒が英語学習に積極的に取り組めるようになる学習デザインを探る。

問いかけという行動が認知能力を発達させる重要なカギである (Ian Leslie, 2022)

問いをつくる重要性については様々な書籍や論文で述べられている。

生徒自らが学びの主体となり、問いをつくり、そのことについて考え続ける力をつけていくようになることを目指す。

【研究課題】

楽曲分析の段階で、**生徒自らが問いをつくる**ことで、生徒の学習に対する意識は、受動的なものから能動的なものへと変化するのか。

2 研究の背景

【生徒の現状】

学ぶ単語数や文法事項の増加



英語科の授業への抵抗の増加
授業を受ける必要感の減少

自分事として捉えていない

(勤務校で2024年度に実施したアンケートより)



【目指す姿】

英語という言葉が持つ奥深さを感じさせるような、生徒が興味・関心を抱ける実践をしていく必要がある。



3 授業デザイン

英語の楽曲を取り入れた授業を、次の手順aからeに沿って展開していく。

鹿嶋 真弓, 石黒 康夫 (2018) 『問いを創る授業—子どものつぶやきから始める主体的で深い学び』 図書文化社 を参考に授業デザインを作成



4 楽曲導入の展開

(ステップ1)

生徒の言葉で問いをつくる

(ステップ2)

楽曲のタイトルや楽曲に関連する写真を黒板に提示し、教師がヒントとなる発問を与える

(ステップ3)

教師から提示される題材と発問をもとに問いをつくる

(ステップ4)

特に取り上げたいと思う問いを選ぶ

(ステップ5)

問いを使って楽曲について深く考える

(ステップ6)

学習のまとめおよび問いづくりのふりかえりをする

5 生徒による問い

生徒の言葉で問いをつくる
「探し求めた問い」

- ① 楽曲導入において歌詞カードを提示する。
- ② その後生徒が歌詞を読み取り問いをつくる。
- ③ 問いをカテゴリー分けして、生徒が取り組みたい問いに分かれてグルーピングをする。
- ④ 各グループで問いについて話し合う。
- ⑤ グループごとに発表し、クラス全体で話し合う。

6 研究の計画

本研究では、実際に授業をした際の生徒の様子映像分析(観察ののち必要に応じてインタビューを実施する)、授業者が授業を行ったのち、生徒が行うまとめ(ふりかえり)の分析、日々の担任と生徒の間で行われる連絡帳でのやりとりも合わせて考える。また、アンケート結果を資料として使用する。

身の回りの現象を科学的概念を使って見つめ直す生徒を育てる理科授業 — 中学校 3 年理科「生命の連続性」単元を事例として —

教職実践研究科: 杉田智史 指導教員: 大谷実・端崎圭一

1 研究の背景

(1) 問題の所在

「理科を勉強すると
日常生活に役立つ」
国際平均 81%
日本 72%
(TIMSS2023)

理科が『役に立つ』
国際平均より低く
改善する必要がある
(中学校学習指導要領解説)

日常の理科の授業

理科で学ぶ知識が
身の回りのことと
結びついていない



(2) リサーチクエスト

理科の授業において、科学的概念はどのように形成されるか。また、身の回りの現象と接する際にも科学的概念が生かされるようにするには、どうすればよいか。

(3) 先行研究

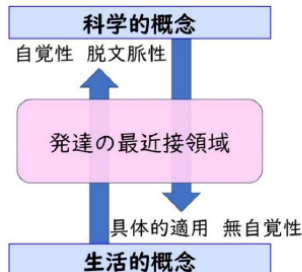
ヴィゴツキー (2001)
概念形成の研究手法
(二重刺激の機能的な方法)

理科の授業では

自然現象

理科学語

相互作用



宮下・加藤 (2015)

授業と身の回りの現象を結びつける

単元の導入で生活とつながりのある体験



単元を貫く問い

2 研究目的

身の回りの現象とのつながりから生徒が立てた「単元を貫く問い」と、
教師の投げかける「身の回りの現象と関連した問い」の2つを軸に授業をデザインし、
その授業を通して、生徒が科学的概念を形成し、身の回りの現象を見つめ直すための要件は何かを検討する。

3 研究対象

(1) 単元

中学校 3 年理科「生命の連続性」
2025 年 4 月～5 月に実施

(2) 対象生徒

石川県内公立中学校に在籍する中学 3 年生
約 140 名 (4 クラス)

4 研究計画・方法

(1) 実践計画

単元の導入 生活とつながりのある事象を提示

単元を貫く問い

(例) イチゴの品種はどのようにつくるか

身の回りの現象と関連する問い

(例) スイカの種子はどのようにできるか

グループで意見交流



(2) 検証方法

科学的概念

発達の最近接領域

生活的概念

教室談話と記述 分析の基準

	生活的概念	科学的概念
レベル 1	自分の経験	理科学語 曖昧
レベル 2	自分の経験 一般性	理科学語 正確
レベル 3	一般性 規則性	理科学語 正確 具体例

(3) 仮説

問いを立てる



理科学語の具象化



概念形成



教職実践研究科:別宗智美 指導教員:吉川一義・新村裕二

生徒が自ら学ぶ国語科授業のデザイン

—「書く」能力の育成を通して—

教職実践研究科 法邑 歩美 指導教員 本所 恵 新村 裕二

研究テーマの背景

【現任校の実態】

生徒：「書く」ことへの苦手意識^(高)

- ・問題意識の欠如
- ・文章化の難しさ

授業：「題材の設定」の場の不足

- ・教師によるテーマ設定
- ・生活経験の不足

⇒個別指導の限界



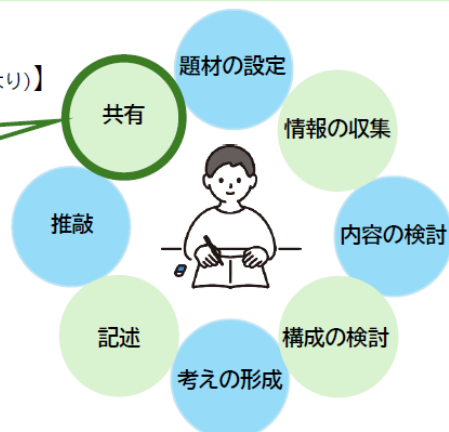
【「書くこと」の学習過程(学習指導要領解説より)】

自分が書いた文章の良い点や改善点を
書き手自身が見出すこと

「共有」の充実

⇒「書く」学習の他の過程にも重要

相手意識



【先行研究より】

●授業での支援

- ・Wood, Bruner & Ross (1976) 「足場架け」
ワークシート、教師からの助言、相互教授法

●相互教授法を取り入れた「書くこと」の協働学習

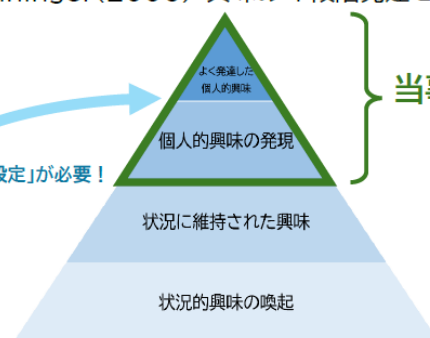
- ・大内(2001)「共同推敲」
…△「推敲」の過程のみの実践
- ・木村(2008)「作文カンファレンス」
…△教師による「題材の設定」

3～5名前後のグループで行う。
ある子どもが自分の文章を皆に読んで聞かせ、他の子どもたちや
教師がそれについて意見や感想を述べる。

●興味づけ

- ・Hidi & Renninger (2006) 「興味の4段階発達モデル」

「書く」意欲を高めるには、
生徒の興味に即した「題材の設定」が必要！



Q.生徒が多様な題材を選ぶ単元においても「作文カンファレンス」は有効なのか？

研究目的

- ①生徒自らが「題材の設定」をするにはどのような手立てが有効かを明らかにする。
- ②「共有」を意識した協働学習は生徒の「書く」能力の育成にどのような効果があったかを明らかにする。

研究対象

石川県内公立中学校 2 年生

研究の方法

- ①「題材の設定」における支援
ニュースを題材とした話し合い活動
- ②「内容の検討」「構成の検討」「記述」「推敲」における支援
「作文カンファレンス」の手法を取り入れた授業

研究計画



検証方法

- 作文・ワークシート・振り返りの分析
- 作文カンファレンスにおける生徒同士の対話分析



知的障害特別支援学校における 系統性のある性教育のあり方に関する実践的検討

教職実践研究科 堀辺神奈 指導教員 田部絢子・中村健司

研究テーマの背景

これまでの性教育は日常生活での個別指導がほとんど



問題が起こつてからの事後指導が多い



国際的には…国連が発行した国際セクシュアリティ教育ガイダンスを学校現場で生かして、「包括的性教育」を行っている。



日本では…

「東京都立七生養護学校で行われていた性教育に対するバッシング以降、学校における性教育は後退してきた」(鶴岡・古井 2024)

歯止め規定

現場は萎縮

日本弁護士連合会 (2024)

日本の学校教育における性教育は、国際的標準から極めて遅れている。性情報の氾濫や不正確な知識ゆえに予期せぬ妊娠・出産や乳児遺棄事件、性加害・被害等が多数発生しており、日本の学校教育における性教育を国際的標準にすることがその事態の改善にとって必要である

➡ 性教育の必要性を述べた意見書を国・地方公共団体に提出した。

研究の目的

知的障害当事者も主体的に学ぶ必要があること、学びたいことがあるのではないかな。
知的障害児にも「包括的性教育」を行うことにより防げることがあるのではないかな。

知的障害特別支援学校における小学部から高等部までの発達段階にあった系統性のある「包括的性教育」を行うために、知的障害を有する児童生徒やその保護者のニーズをふまえた性教育のあり方を検討し、小学部から高等部までの系統性のある全体計画の作成と実践を通して改善することを目的とする。

研究対象

研究Ⅰ

全国都道府県教育委員会の「性に関する指導の手引き」の検討



全国都道府県の教育委員会

研究Ⅱ

知的障害特別支援学校における性教育に関する指導の実態と当事者ニーズ



- ① A 県立特別支援学校の性教育担当教員および養護教諭
- ② A 県立 B 特別支援学校の児童生徒および保護者

研究Ⅲ

知的障害特別支援学校における性教育に関する全体計画



A 県立 B 特別支援学校知的障害教育部門の小・中・高等部の性教育担当教員および養護教諭

研究Ⅳ

I～Ⅲをふまえた性教育の実践



A 県立 B 特別支援学校知的障害教育部門小学部

研究計画・方法

インターネットで全国の都道府県が発行している「性に関する指導の手引き」を調査し、動向を把握する(2024 年 10～12 月実施)



- ・ A 県立特別支援学校の性教育担当者に質問紙法調査および半構造化面接法調査(2025 年 1～2 月実施)
- ・ 児童生徒、保護者に Google フォームによるオンライン質問紙法調査(2025 年 1～2 月実施)
- ・ 発達障害支援センター、福祉型障害児入所施設における半構造化面接法調査(2025 年 3 月までに実施)

A 県立 B 特別支援学校の管理職、小・中・高等部の性教育担当者、養護教諭による定期的な話し合いの機会を通して全体計画を作成する(2025 年度実施予定)



A 県立 B 特別支援学校小学部における教育実践
・ 授業計画をたてて実践を行う
・ 授業における児童の発言や行動を記録し、その後の変容等をエピソード記録として分析する。
(2025 年度実施予定)



これまでの取り組みでわかったこと

○「性に関する指導の手引き」は全国でも作成しているところが少なく、作成されていても学習指導要領に基づいて作成されているものが多い。特別支援学校の指導については、包括的性教育の計画があるものは 2 県のみだった

- 保護者、教員ともに回答した全員が学校において性教育は必要であると述べた
- 学校で扱ってほしい性教育のテーマは、児童生徒と保護者と上位 2 つは一致しており、さらに保護者は性的虐待や性暴力、妊娠や避妊についても扱ってほしいと考えていることがわかった

自分や周りの人を大切にし、性暴力や加害者にならないようにすること、自らの人生において性に関する責任ある自由な選択をする知識とスキルを身に付けることができる



「見方が変わると思考が変わる」を軸にした生徒の思考を促す外国語の授業デザイン

金沢大学教職大学院 松下菜々子

指導教員 滝沢雄一・端崎圭一

〈研究目的〉

思考力

「見方が変わると思考が変わる」を軸にして、生徒の思考を促す外国語科の授業デザインを提案すること。

〈研究背景〉

異なる視点から物事を見る
→発見・気づき・深い学び

「この経験を授業で取り入れたい！」
という思いから。



〈研究計画〉

☆目標：「テキスト状況から、拾いきれなかった部分まで想像することができる」

【想定している授業の流れ】導入→理解の段階→**思考の段階**→表現の段階（研究は読むことに限定して行う。）

☆**思考**：発展的に生徒に考えさせる段階

☆思考の段階で生徒に取り組ませること：推論

自分視点でテキストを読む、
内容理解

推論の種類（津田塾大学言語文化研究所・2002）	推論の役割
bridging inferences	テキスト理解のために情報をつなげる推論
elaborative inferences	テキスト内容を膨らませる推論

テキスト理解の中で必ず生成される推論（Graesser, Singer, Trabasso・1994）

- ①照応関係の推論
 - ②文法上の格（case）を見分ける推論
 - ③原因を見出す推論
 - ④登場人物の行為の究極の目的あるいは動機、意図を見出す推論
 - ⑤テキストの主題を見出す推論
 - ⑥登場人物の心情をつかむ推論
- （⑥例：～はどう思っているか？）

教室内であまり取り
上げる機会が少ない

津田塾大学言語文化研究所（2002）
によると、④～⑥は読解練習で必ず行われて
いるとは言えない。

「見方」の変化とは・・・。

対話文の中で、
読み手（自分）視点
→書き手（登場人物）視点へ

推論発問



〈リサーチエスチョン〉

- （1）生徒はどのような反応をするのか
- （2）生徒はどのような解答を持つのか
- （3）（2）の解答を分析する中で、どのような推論発問が一番思考を促すのに有効か

〈予想される反応・効果〉

- （1）テキスト上に答えが書かれていないことに戸惑う
- （2）繰り返される推論発問に対し、答えてみようとする
- （3）テキストから手掛かりを探し出し、状況把握・思考する

知的障害のある高等部生徒への社会科教育の在り方 —自分の思いや考えを表現できる主体の育成を目指して—

教職実践研究科 森田綾子 指導教員：吉川一義、中村健司

研究の背景

インクルーシブ社会の実現

社会科の目標（資質・能力）の比較

※異なる箇所を赤字で示す

<p>(1) 地域や我が国の国土の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解するとともに、様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) 社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。</p> <p>(3) 社会的事象について、よりよい社会を主体的に問題解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の発展を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う。</p>	<p>(1) 地域や我が国の国土の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統と文化及び外国の様子について、様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) 社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、自分の生活と結びつけて考えたり、社会への関わり方を選択・判断したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。</p> <p>(3) 社会に主体的に関わりようとする態度や、よりよい社会を考えたことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の発展を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う。</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

知的障害のない人たちがつくった社会

よりよい社会の形成者

今ある社会の利用者

自分たち抜きでつくられた社会に関わるだけの利用者

知的障害のある人たち

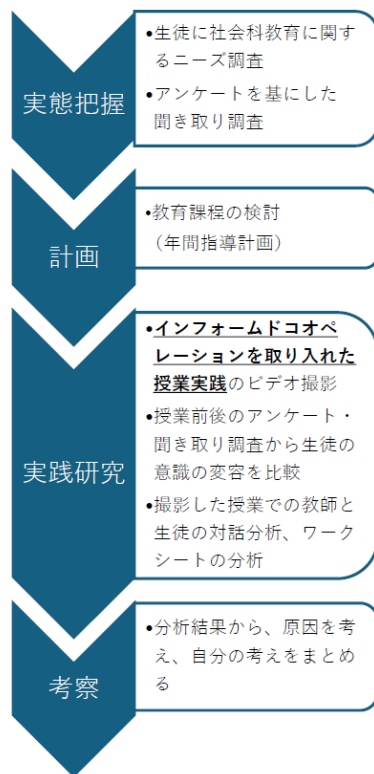
今と同じ社会構造が繰り返される

研究の目的

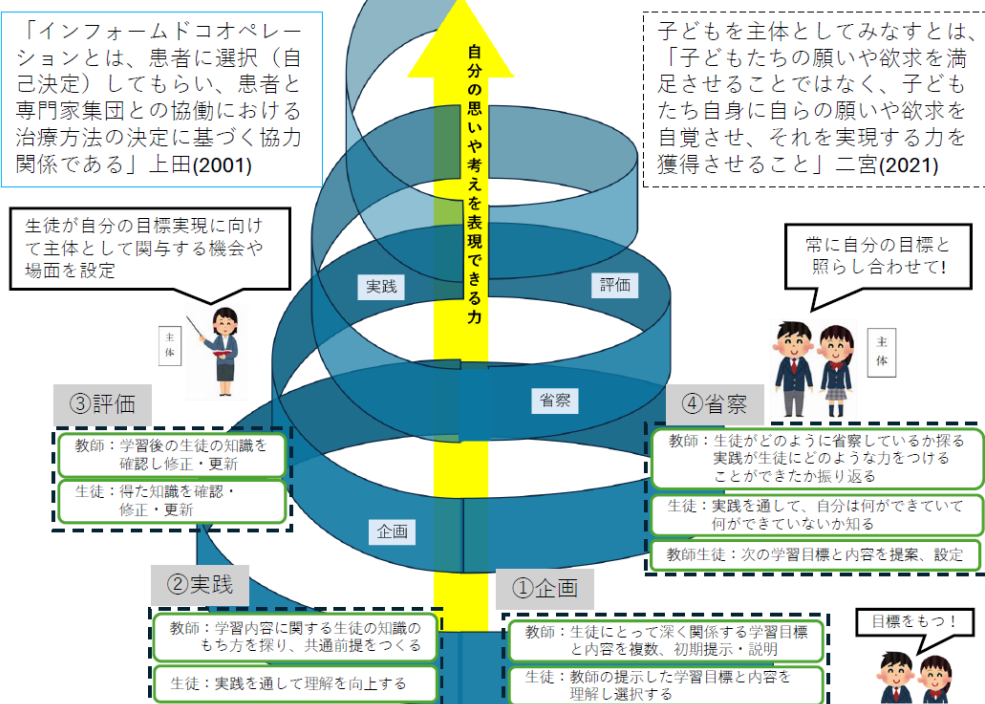
特別支援学校・高等部の社会科の授業において、軽度知的障害のある生徒たちが自分の思いや考えを表現できるようになるには、どのような手立てが有効かを明らかにする。

特別支援学校・高等部の社会科の授業において、よりよい社会と幸福な人生を自ら創りだしていける形成者（自分の思いや考えを表現できる主体）を育てるには？

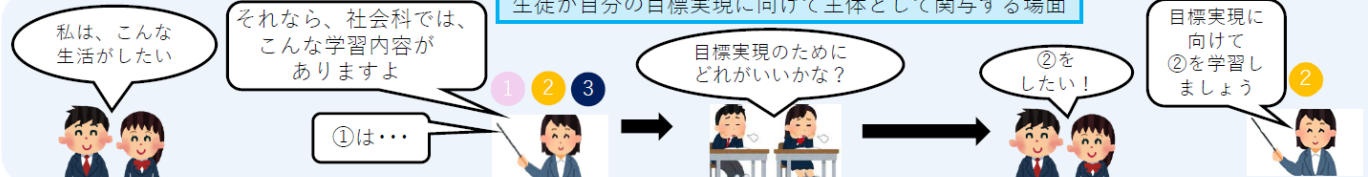
研究計画



インフォームドコオペレーションを取り入れた授業を行い、教師も生徒も主体となり、相互主体的な関係の中で、授業を協働して企画・実践・評価・省察する。教師は「生徒が自分の目標実現に向けて主体として関与する機会や場面」を設定する。教師が設定した「生徒が自分の目標実現に向けて主体として関与する場面」で、どのような過程を経て自己の考えを形成しているか、もしくは形成できなかったのか分析する



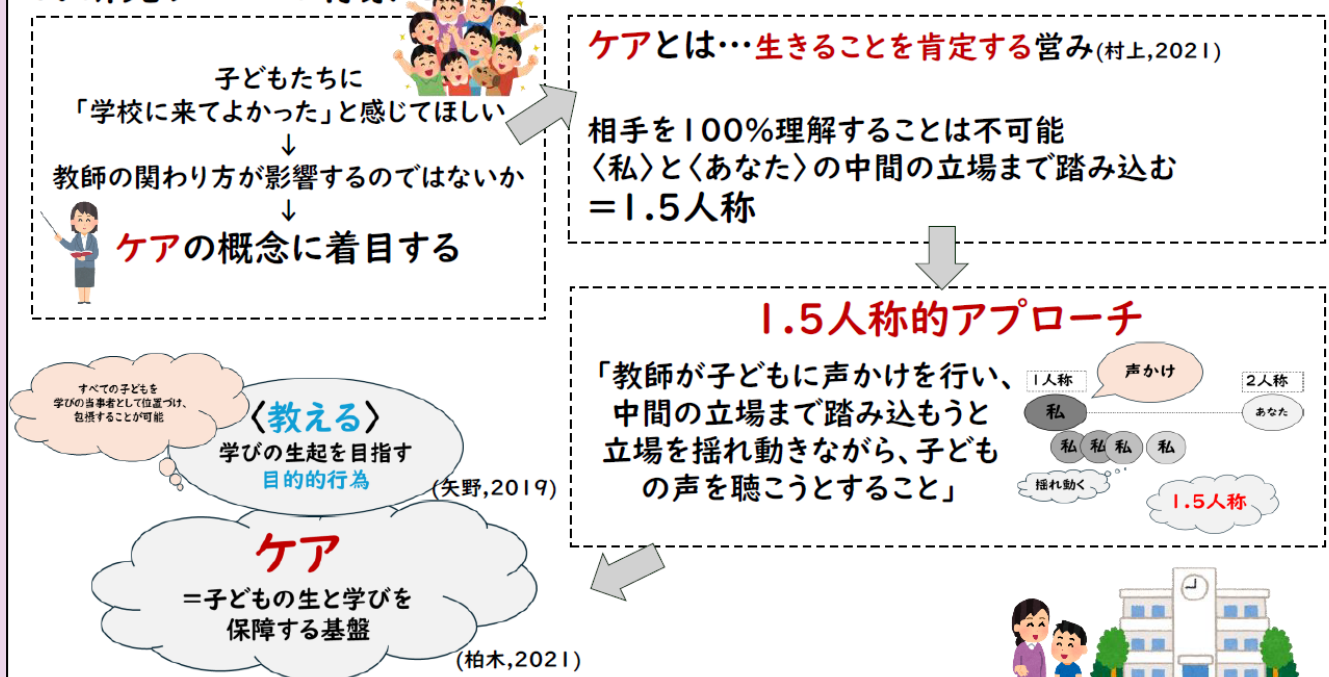
生徒が自分の目標実現に向けて主体として関与する場面



1.5人称的アプローチによる教師と子どもの関わりに関する研究 ーケアの視点を通してー

教職実践研究科1年 弥久保里菜 指導教員 鈴木瞬 小浦寛

1. 研究テーマの背景



2. 研究目的

小学校において、授業中や休み時間における教師の子どもへの関わりを観察し、
また1.5 人称的アプローチを意識して自身が実践することを通して、
ケアの生成変化のあり様を明らかにする。

3. 研究方法

①三分割実践記録シート(住野・中山,2008)

教師と子どもの関わりを
捉えるために観察及び実践を行う

子どもの活動	実践者の思考・行動	実践者の主観

②オートエスノグラフィー(楠見,2024/井本,2021)

どのように、なぜ、何を感じたか
ということを探ることを通して、
文化的・社会的文脈の理解を深める

③「教育とケアの接続モデル」(矢野,2019)

実践を振り返る枠組みとして用いる

〈一人称複数の関係の成立〉
フェイズ0:〈わたし〉が参加者となる局面
フェイズ1:〈わたし〉と〈あなた〉という
両者が出会い、目的を探る局面
フェイズ2:関係の中に相互性が生まれる局面
フェイズ3:〈われわれ〉という一人称複数へ
解消される局面

4. 研究計画

1 学期

- ・授業、授業以外の時間での
教師の子どもへの関わり方を観察
- ・授業以外の時間での子どもへの関わりを実践

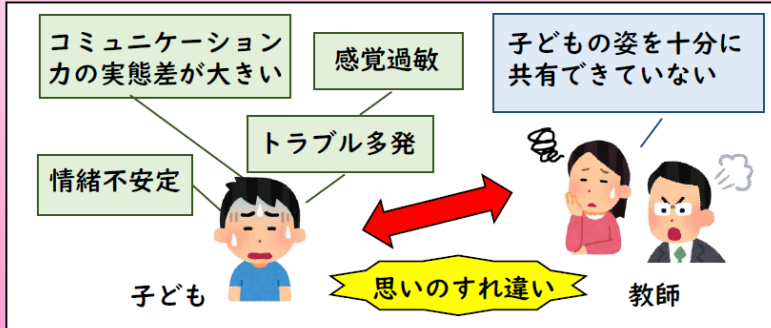
2 学期

- ・授業実践
- ・授業以外の時間での子どもへの関わりを実践

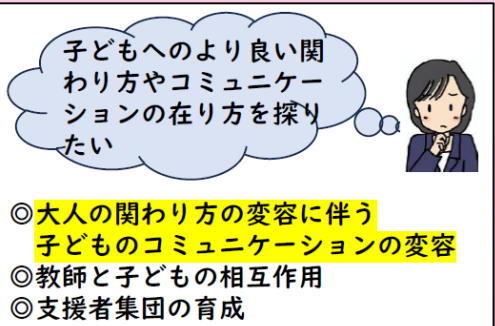
知的障害児と教師のコミュニケーションの変容 ーインリアルアプローチを通してー

教職実践研究科1年 吉村真由子 指導教員 武居渡 中村健司

1 研究の背景



2 研究目的



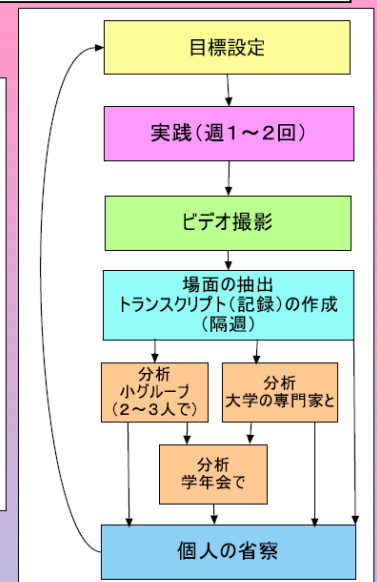
3 研究方法

◎インリアル法を用いた関わり ビデオ分析

- ・言語コミュニケーションアプローチ
- ・子どものリズムやペースを大切に、子どもの「意図」に合わせるにより「やりとり遊び」が楽しめるようにする

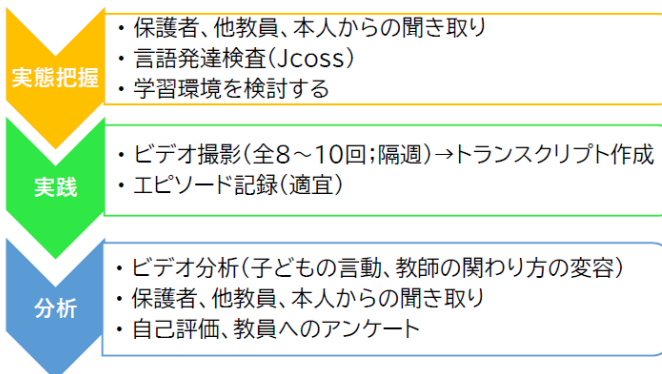
基本姿勢 SOUL (ソウル)
 Silence: 静かに見守る
 Observation: よく観察する
 Understanding: 深く理解する
 Listening: 子どものことばを聴く

対象児の言動	教師の言動
飛行機の玩具に手を伸ばす	「はい、どうぞ」と手渡す
笑って受け取り、車の玩具を見て「アッカー」と言う	「飛行機どうぞ」が望ましかった 「飛行機、飛んでいるね」と言う
トランスクリプト例	対象児の視線に気付いていない



4 研究計画

全体計画



対象者

- ・小学部低学年(知的障害)児童1名 発語あり(一語文~二語文程度)
- ・学年教員8~10名程度
- ・保護者

主な実践場面 自立活動

導入 教師と児童の自由会話

展開① コミュニケーションゲーム(集団)

展開②・まとめ
自由遊び(個別)
好きな遊び、ものを通して

評価

①行動面、②発達状況、③環境面の側面から子ども、大人の変容を捉える

自ら思いを伝える



子どもの主体性を大切にできる